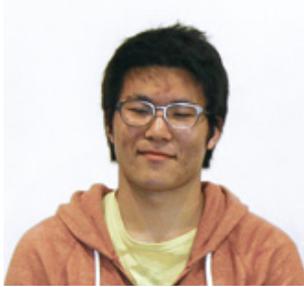


慶應義塾大学 総合政策学部環境情報学部

SFC（湘南藤沢キャンパス）では、総合政策学部と環境情報学部を文理に区別して考えていません。ですから、学生は2つの学部の授業や研究会を自由に行き来して学ぶことができ、幅広い研究領域から自らの問題を発見し、その解決を目指すことができます。



■大学生
川本息生さん



■先生
神成淳司先生



■卒業生
田中一弘さん

CONTENTS

- プロフィール
- 大学生活について
- 就職活動、仕事について
- 5年後に向けて
- 高校生へのアドバイス

●プロフィール

先生はどのような研究をされているのですか？



■先生

農業は、簡単にいうと熟練農家とそうでない方とでは生産性も違うし、できあがる品質も収益もまったく違います。私が今、一番興味を持っているのが「農業の熟練者の智慧」をどういうふうに産業として役立てるかということです。もともと私はコンピュータが専門で、ものづくりもやっていました。ものづくりというのは相手が無機物ですので、精度をあげれば最適化計算ができるのですね。それに対して農業というのは相手が生き物ですから、そのつど、そのつどで状況が変わる。同じことをやっていたらいいというわけにはいかないのです。私のようなIT屋にとっては、そこがとても面白いテーマだったので

す。ものづくりは最適化すると上限がある。やりつくすことができるのです。しかし、農業には天井はありません。例えばトマトでいえば、3個100円のトマトがあれば、1個800円のトマトもある。つまり付加価値です。農業は自然を相手にしていますから、こうすればうまくいくという結論はありません。実は、それをやっているのが熟練農家であり、私が先ほど言いました「農業の熟練者の智慧」なのです。その智慧を解明することはできないと思いますし、解き明かすことに意味はないとも思います。毎日、毎日、環境はかわりますから、「この条件のときには、こうします」、という事例が1つあっても、まったく意味はありません。それよりも、今、何をしなければならないのかが、わからなければならない。ここが大切なのです。

ものづくりでは、あきらかに機械が中心。しかし相手が環境の農業においては、人間が主体。コンピュータが人間に代わることはできないのです。ということは、農業の熟練者の智慧を解明するのではなく、その智慧をより多くの人が使えるようにする、あるいは熟練者の智慧を次の人に継承することのほうがいいと考えています。

水やり10年という言葉がありますが、今日の社会で水をやるだけで10年かかるのであれば、食べていけない。そこを、熟練者の智慧を使って3年にすれば暮らしていけますよね。農業は儲からない職業だといわれていますが、実は、儲かっている人はたくさんいます。そういう意味では、生産性まで考えるととても面白いです。

農業の将来性については、どのようにお考えですか？

■先生

日本の産業の中で何が残るかという、収益性の高い産業に育てていけば農業だと思います。将来性はありますよ。

作物は輸送によって傷みますよね。ということは、その場で作るのが一番いい。輸送コストもかからないし…。たとえば、日本からタイに輸出する日数をかけるのであれば、タイで日本型の農業を実現して、そこで日本が稼げばいい。小規模でも採算のとれる農業が進んでいけば、産地のあり方が変わってくると思います。つまり、輸送に適したものは集約的に農家が作ってもいいのですが、鮮度の高いものは地産地消をやればいい。それが東京であってもいい。そんな可能性や高齢化社会ということも踏まえると、これからの農業というのは伸び代のある産業だと思っています。

田中さんは、どのようなお仕事をされているのですか？

■卒業生

私は、農業生産者様に農業機械や設備をリースしているJA三井リース株式会社の農林水産本部事業開発部にいます。2015年4月より新設されたこの事業開発部は、農林水産業界全体がこれからの時代を生き抜くための、新しいしくみづくりをすることがミッションであると私は考えています。今まで主な業務としてきたリースだけでなく、農業の現場に入り込むことでみえてくるニーズを、付加価値をつけたファイナンスサービスとして展開するところまで考えなければなりません。

最近の案件でいえば、先駆的なイチゴ農家さんの新しい取り組みに投資する案件がありました。「技術や設備を標準モデル化し、販路まで含めた包括的な営農支援サービスに取り組むことで、農業の担い手育成を目指す」というプランを評価し投資を行いました。この案件はJA三井リースとして新

しい切り口で農業界のニーズに応える一つの事例となったと考えています。

お仕事の内容は、神成先生の研究会で勉強されたことではないでしょうか。

■卒業生

そうなんです。まさに神成研究会で学んだことが、会社でも役立っています。農業ITをはじめとした知識はもちろんですが、世の中のモノやコトに対する見方を習得できたことも、非常に役立っていると感じています。先生から教わった「視野・視座・視点」という言葉は、仕事をする上で基本的な考え方として意識するようにしています。ただ、まだまだ私も未熟者。仕事のアドバイスをいただくために、実は、今でもときどき神成先生をお訪ねするんです（笑）。



●大学生活について

SFCの2つの学部について教えてください

■先生

SFCには、総合政策学部と環境情報学部があり、学生は2つの学部の授業や研究会を自由に行き来することができるのが特徴です。2学部に通ずる基盤はIT、そのITに対してどの角度から切り込むかというアプローチの角度の問題です。

学問体系として専門分野に特化して掘り下げていくことは重要ですが、今の社会がこのまま超高齢社会になって、このまま突き進んでいき、10年、あるいは20年後にはたして明るい社会が待っているかという、それは疑問です。

従来の学問体系のなかで、一つひとつの分野でそれぞれ先駆的なことをやって、社会は変わっていくのでしょうか。今、大切なことはもっとフラットな領域で、教員間、あるいは教員と学生とのコラボレーションの中で、次の社会をどう描いていくのかを考えていくのが、慶應義塾大学の中におけるSFCがもつ役割だと思うのです。われわれが学際的なことをやるための前提としては、個々の学問分野がきちんと伸びていかなければならない。そして個々の分野それぞれが社会を変えていくことができないのなら、連携させることによって相乗効果をもたせて、次の社会を切り開いていく。その役割がSFCなのです。

総合政策学部と環境情報学部は、それぞれが役割をもち、専門性をもっています。入学する学生は自分の興味から、それに近い先生のところへ行けばいい。その中で興味が変わるかもしれないし、また、次の社会をどう変えていくかという目標は変わらなくても、アプローチが違ふんです。大学で学ぶことで、われわれ教員が一番教えなければならないのは、ものの考え方や捉え方なんです。

当たり前ですが、いろいろなものごとには理系的な側面も、文系的な側面も両方あるんです。文系だから、理系だからという発想はあまり意味がないですね。

SFCに入学されたきっかけは何ですか？



■大学生

私の実家が隠岐の島で牛を飼っていることもあり、ずっと農業大学へ進学しようと思っていました。自分のキャリアを考えながらいろいろな農業大学について調べているうちに、「それぞれの大学でやっている研究内容がどうもじっくりこない」、「将来、実家に帰り島の農業を変えていくために必要な力を身につけるにはどうしたらいいんだろう」、そんなことを考えていたときに、SFC 出身の塾の先生から神成先生のことをお聞きしたんです。それで、先生が研究されていることを、私は畜産でやろうと考えました。

将来は、新しい畜産をはじめることによって隠岐の島全体の地域産業を立て直し、生活できるくらいの技術を身につけていかなければならないと思っています。

■卒業生

川本君は環境情報学部ですが、私が入学したのは総合政策学部です。SFC では学部に関係なく、授業や研究会を自由に行き来することができるのです。キャンパスも同じですし、学部名を意識することは、ほとんどないですね。

なぜ、総合政策学部かということ、夕張市の破綻がきっかけでした。高校生ながら「北海道、なんでこんなにヤバイんだろう」と真剣に悩みました（笑）。それで地方行政や自治に興味を持ちはじめ、地域再生について学びたいと思ったのです。夕張市は私の地元である札幌からとても近いにも関わらず生活水準がまったく違う。その格差に疑問をもちました。問題解決の糸口を探るには、分野横断的に考えなければならぬと考え、出会ったのがこの学部。高校の担任の先生から、SFC について進路相談のときに聞いたのです。

特徴的な学びにはどんなものがありますか。

■卒業生

SFC の文化とでもいうのでしょうか。学生にはやりたいことが明確にあるのが当たり前という空気があります。私も、地域再生を勉強したいと言っているわりには、第一次産業にほとんど触れたことがありませんでしたし、何か軸を持ちたいと考えていました。「まずは動いてみよう」と考え、大学1年の夏休みに高知県の農家でお手伝いをしました。これが先生の研究会に入るきっかけですね。その経験は楽しく、これを機に農業にのめり込むわけですが、SFC には農学部がない。どの研究室がよいのかわからない状況の中で、神成先生に出会ったのです。先生が関わっていらしゃった様々なプロジェクトに参加しました。

その中の「地域力向上プロジェクト」では、長崎県の地域に入りこみ、学生の立場で地域を見て提案をしました。年に何回も泊り込んで、地域の行政の方、農家の方、漁師の方と議論をしました。私は「地域産品の高付加価値化」というテーマで発表しましたが、地域の方から高評価を頂いたときは嬉しかったですね。また、卒業間際には、神成先生がご担当されていた「仙台イチゴのプロジェクト」に参加

しました。ブランディングという観点から、何かできないかというお話があったのです。宮城県の仙台イチゴが震災によってブランド価値が減耗する恐れがある中、知的財産権の観点を主軸にどんなブランド価値の保護ができるのかまとめていきました。

■先生

SFC は非常にフラットで、教員同士が目的やテーマに応じてコラボしていくんです。先ほどの田中君の仙台イチゴのプロジェクトも、他の教員がもってきたものでしたが、テーマに第一次産業が入っていたので私が担当したんです。

■大学生

私の場合は、これからいろいろなプロジェクトに参加していくことになりますね。でも、個人的に春休みなどの長期の休みに、鹿児島島の離島の畜産の状況を見に行ったり、島の伝統的な飼い方や畜産家の独自の考えなどを聞く機会を作りました。「地域産業からみた地域振興『SHIMA 探究』」では、東京や京都の大学生 30 人くらいを集めて、3つの島でそれぞれ農業や福祉の体験をし、その体験から出てきた課題などを地元の中学や高校で、生徒にプレゼンテーションするんです。そして、私たちも生徒からアドバイスをもらう。学校の先生もそうでしたが、地元にはいない大学生に出会い、アドバイスをもらえるということで、農家の人も喜んでいらっしゃいましたね。中には、自分の仕事に自信がもてたという方もいらっしゃいました。私の実家も島にあるので、この島での経験を通して私の実家のある島の未来像が見えた感じがしました。



■先生

学生は教員を使う権利をもっていると私は思います。教員の知識やヒューマンネットワークを使えるくらいが、一番面白い。

田中君のやったことでいえば、プロジェクトという場は与えたけど、あとは、いかに教員を駆使して田中君自身がやりたいことを実現させるかです。そして、私はそれをどう支援する

かですね。悩めば相談にのりますし、どういうことができそうかのアドバイスもします。川本君のやっていることでいえば、できることがあればアドバイスもしますし、私が納得すれば、いくらでも支援します。

■大学生

そうでした。先生にはじめてお会いしたときも、「うちの研究会は、私をいかにうまく使うかだよ」といわれ、面白い先生だなと思った記憶があります。

■先生

理想は、私のできないことを、私を使って勝手にやって欲しい。これです。研究会に所属することは、その先生を使うことで、よりインセンティブをもつということですからね。

●就職活動、仕事について

この会社に就職された理由は？

■卒業生

農業を大きな軸に据えているいろいろな会社をまわったのですが、あまりピンとくる会社がなかった中で「出会ったな！」と思ったのが、JA 三井リース株式会社でした。JA グループと三井グループという異なるバックボーンを併せ持った会社であれば、既存の枠を超えて連携することで新しい未来を作れるのではないかと考えたからです。また、この会社はファイナンサーとして農家さんの経営状況を審査する立場でもあるので、農業経営を分析する力を早いうちに身につけることができることも魅力の一つと感じていました。

仕事のやりがいとはどんなことですか？

■卒業生

今、仕事はとても面白いですね。現在お米農家さんを担当しているのですが、農家さんに喜んでもらえるようなしくみを作って提供させていただき、農家さんから「このしくみがあつたから経営が改善した」と言ってもらったときは、本当に嬉しく思います。ただ、我々の取り組みはまだ点のつながりでしかない。それを世の中にしくみとして出すまでには、まだまだハードルがあります。そのハードルを一つずつ越えていくのは、とても面白いことだと感じています。既存の枠組みや価値観にとらわれずに、新しい価値観を創っていくことは大変ですが、社会に貢献していることが実感できると、またやる気も出てきます。

川本さんは将来をどのように考えていますか？

■大学生

すぐに実家に帰ることは考えていません。一度、実家に帰ってからそのあと就職するのは不可能に近いので、卒業後は、JA や日本食肉流通センターなどへ就職して、いろいろなことを経験できたらと思います。営業職などまったく農業と関係のない分野で働くことも、農業を新しく改革していくために必要な力を身につけることができると考えています。

■先生

学生にもよくいいますが、社会意識をもってほしいですね。社会を変えようとするなら、いろいろな角度から社会をみななければいけない。私も、教員のほかに国家公務員という顔をもっていますよ。

● 5年後に向けて

5年後に皆さんはなにをしていますか？

■大学生

5年後といえば、卒業していますね。就職しているのならいろいろな農家さんの経営状態をみる仕事をしているのかな…。

■先生

就職しない可能性もあるのかな？川本君は就職しなかったとしても、「農業を変えたい」という今の気持ちをもち続けて、そのために足りないものはなにかを求めて、日本中を回っているかも知れないね。

■大学生

遠い将来の夢は、はっきりしているんですけどね。具体的にいえば、後継者がなく、使っていない農地を若い人に受け継いでもらうというシステムをつくり、地域としての活動を通して、地域産業として成り立たせる。そんな仕事がしたいと考えています。

■卒業生

私は5年後には30歳ですね。自分達が考えたしくみが、世の中に「当たり前のもの」として受け入れられている未来になっていたらいいなと思います。おそらく、そのときはまた別の新しいしくみづくりに奮闘していることでしょう。

● 高校生へのアドバイス

高校生へアドバイスをお願いします



■先生

興味というのは、どんどん変わっていくものだと思います。その中で興味のもてることを、きちんと発見すること。これが大切なことです。ものごとを面白いと評価する力は、私たちが使わなければならない重要な能力だと思いますよ。

例えば、高校の勉強が面白くないと感じていても、そこで、自分が興味をもてるように面白くするためにはどうすればよ

いかを考える。どんなことにも、一つくらいは興味のもてることがあるはずですよ。どんなにつまらな

いことでも、面白くしようとすることですね。

■卒業生

実は、通っていた高校は進学校で、成績もそこそこ良かったので自分は医者になると思い込んでいました。ただ、高校2年生の1学期に、勉強をほとんどせずに学校祭実行委員長に打ち込んだ時期があり、成績は急降下（笑）。その時期に、進路に悩み、自分が熱を持って打ち込めることは何だろうと真剣に考え、出した結論が「SFCで地域再生の勉強をしたい」ということだったのだと思います。自分の成績や親からの言葉に流されず、「自分で考え抜いて決断した」という経験は、とても有意義だったと思っています。

■大学生

面白いことや興味のあることで進路を選ぶときに、自分が思い描いている方法が必ずしも最短距離ではないし、最短距離だからといって、それが一番よい方法だとも限りません。いろいろな分野に目を向けることも大切ですし、何を勉強したいのかではなく、自分が何をしたいのか、何になりたいのかを考えると、自ずと自分が身につけるべき力が学べる大学が分かってくるのではないのでしょうか。自分がなりたいたいものになるために、あまり凝り固まった考え方をしないほうがいいのではないかと思います。

●インタビューに答えてくれた方々



■先生

神成淳司先生

慶應義塾大学環境情報学部 准教授
慶應義塾大学医学部 准教授（兼任）
静岡県立沼津東高等学校出身



■卒業生

田中一弘さん

JA三井リース株式会社勤務
私立北嶺高等学校出身



■大学生

川本息生さん

慶應義塾大学環境情報学部2年生
島根県立隠岐島前高等学校出身